



Handwritten title slip in a rectangular frame, likely containing the book's title in Japanese characters.

13
1860
3止

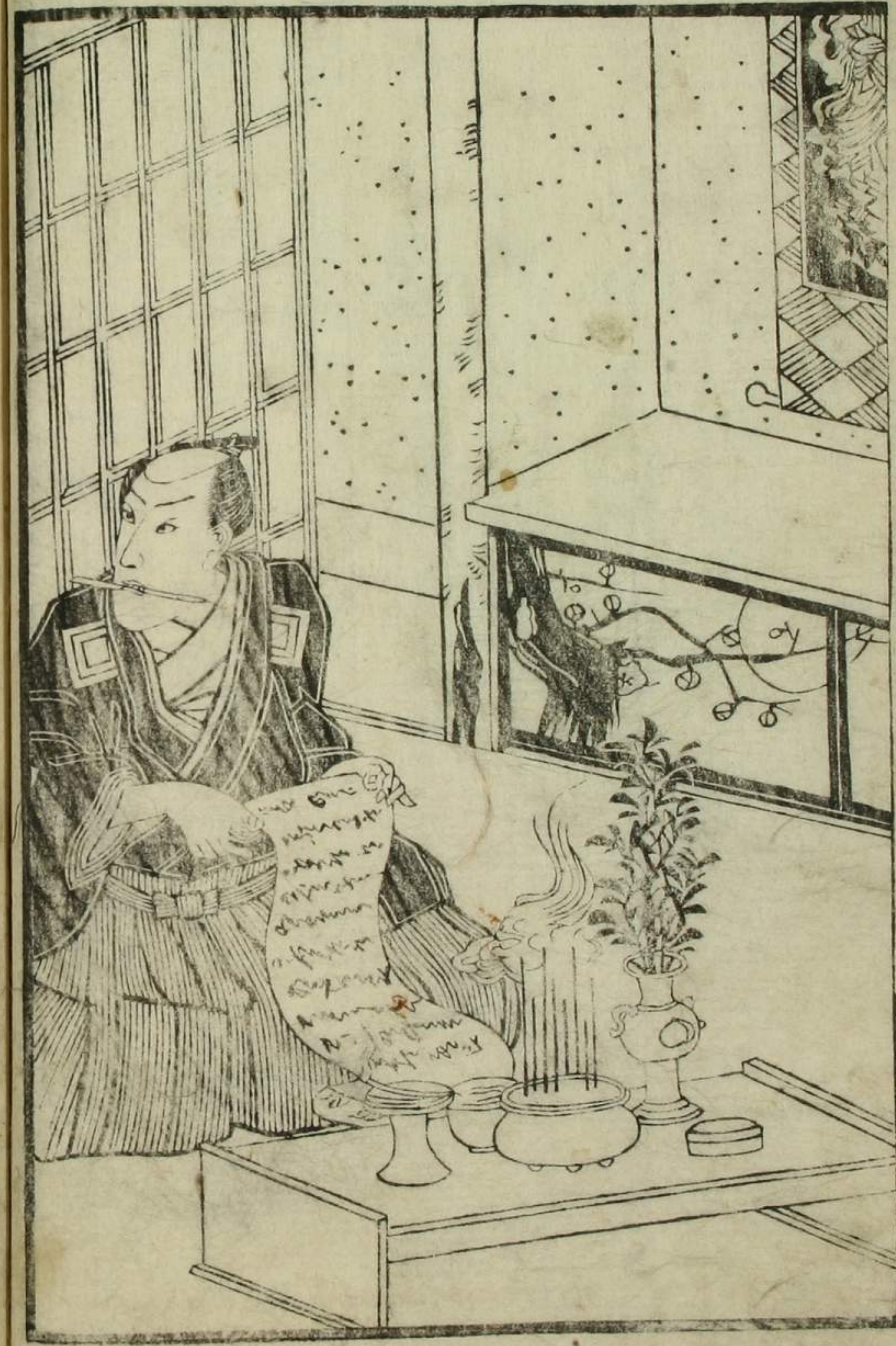
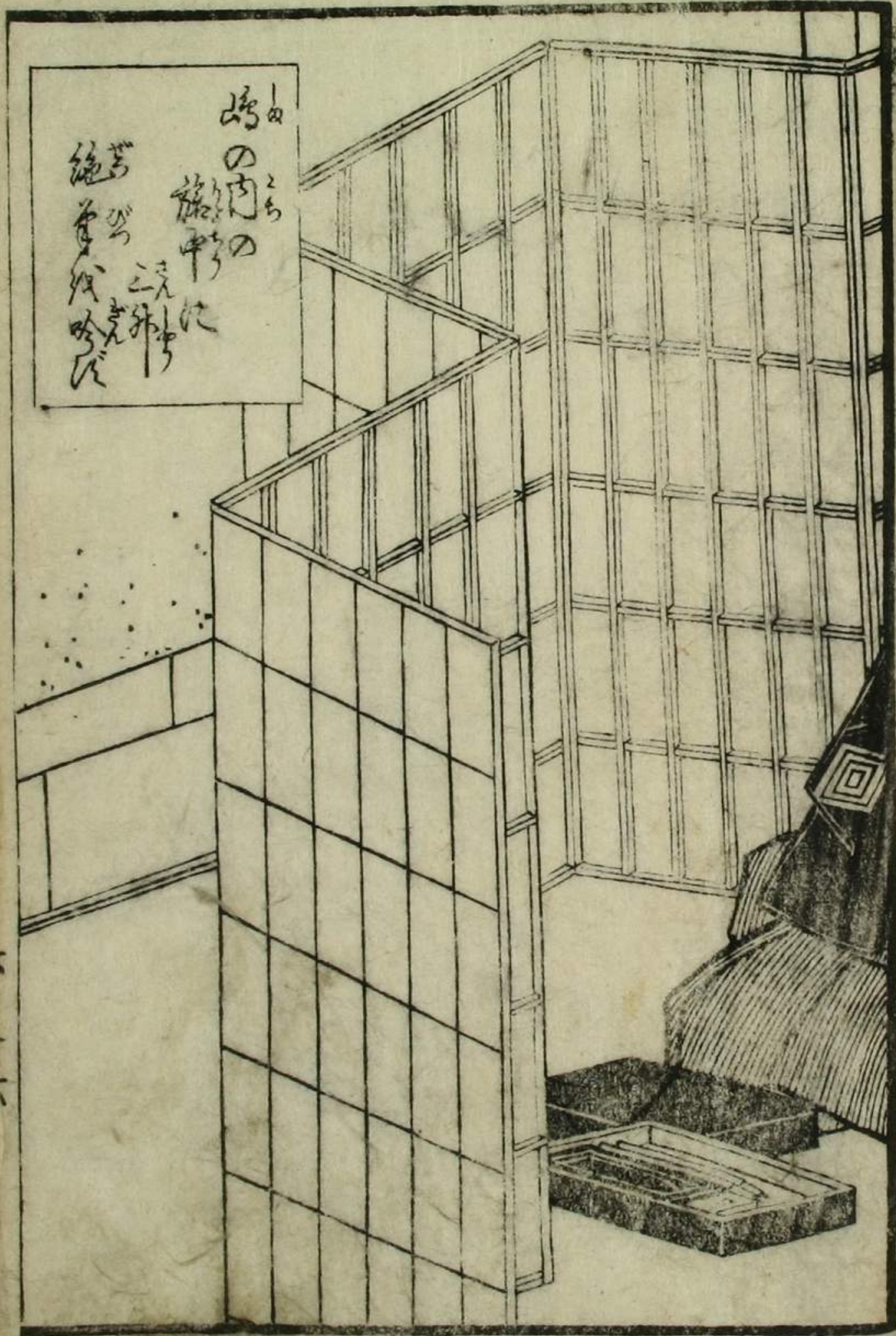


月が多々くかゝる事ハ何れも夫ハ後悔まじきと思
ふが、此も亦もなぬりふ方あり志しむる因縁
といふもあつたり文化年中此より六代目園
十郎母二歳して早世せし孫の七代目と今の海老
尾園十郎とて家督の時去相入の先生来り代
家不承の所の子に此に叙相成りしれ時お客より
世にいふ品り又代々家不承りしる相口の程の事
記されしも名海老尾村にありやといふ不記は品り

此叙相甚しく子孫不承りし何家不承りし事
物おぼしび又おぼしむる又と評承りし事納せしるべしと
相者此海老尾村に七代目園十郎は年の次で海老尾の成田
山(内)なる事の時を是しと四十余年の昔にありしれど
誰有し知者亦し今の年五七年の以前成田山へ
系譜の時其程の成田山へ納めおける額面多年の
里霜を経る由(換)りて落るるより八代目と年
次(の)の附あり何れに於て扱て見ざる不承りとして

一点の情有りて非偶とありふれく有り院主に
其由所ねがへ親父が有納の品汝が心はほろろと
あれはかまひして別の一枚を納めて右に鏡力か
おろして吾常の活料として始終秘想成ては後
ゆゑも帯しあひしる相者あ原お案の一言思ひ
あがり悔おおも驚歎あひり有り其附不動照る
金伽羅制多伽二童子は批評をすめい非が婆波女
の泣状をありましくも孝死しては義利を合さ

ある者るれば非劫の死をありれは汝元來世界に
廣大なると汝は梨園子身の中小人とありて
常とする如狂言中の忠孝悌の道を只記す
似たりと雖作者の智慧ありて無理小ありては物
るればとるふは昔祐天を吾劔を吞ぐて血を
吐く智識とるなり汝も亦之に汝でもす
まふかて鏡力を飲る故不鬼とるなり返
も鏡力あり惜きとるなり立者不かる故



理も云て掛りの者、以て國りて、罪有り、娘子其の念
が、不しく、のる、く、速、不、極、樂、一、を、巻、く、く、吾、侍、上、居、て
歌、舞、の、善、善、薩、を、見、奉、ふ、べ、一、系、東、極、樂、一、を、世
念、无、相、の、地、有、り、善、惡、无、差、別、一、の、唯、善、根、を、積、ま
る、者、も、早、く、仏、有、成、と、通、例、の、事、一、有、り、善、根、も
る、く、惡、業、も、多、く、只、何、有、の、郷、は、遊、ぶ、者、以、て
と、是、を、善、哉、と、汝、吾、族、宿、一、中、釋、多、く、有、る、者
不、蠲、蠲、と、甘、酒、を、と、汝、族、一、信、心、の、北、軍、の、を

善、哉、扱、ひ、る、善、根、有、れ、ば、其、法、性、を、有、る、禍、非
業、の、厄、難、も、逃、る、處、を、お、も、た、れ、ど、深、く、慶、喜、を、
の、檀、香、伽、羅、し、火、不、之、う、る、も、其、真、外、心、を、け、
制、多、伽、童子、が、迹、を、る、隙、不、く、此、の、變、も、死、り
され、た、と、上、く、も、自、其、高、貴、と、り、も、厄、災、を、免、れ、
復、の、不、なる、所、以、り、汝、が、胸、中、を、帯、る、に、逆、に、
通、上、道、を、お、も、た、れ、も、り、と、り、立、者、の、懐、子、を、世、の
中、の、難、苦、以、せ、る、故、短、氣、を、有、る、を、免、る、を、り

父海老丸が詞をきくとき孝子と名をいふるれが
為にすぬと知るる身と肉をば任せ置かれど彼はし
より某の某屋の女とて着た時より男をばあつ
つひて度ふられざる元練のけごめなり 隠居の如
ふるひさる也大坂よりと莫大の陰謀も出来たり
と突けり其手並を知る故海が情状をも割り候
させしより味増用人に託され本場を始末居所
の本宅隠居取寄藤屋に家までくじ方不揮候

入経法をきき迎へし中々女とて出来がたなり
一場大借の度も従く小片づれりや本心と思ひしる
より又手懸を始めり 親父も女もきつひたれど
勝負事よりおしおたれりいひしといふ人めあはせの
中にお思ひどもまき先をあらさ身でも好間いと思ひ懸
しく思ふものもあらるれど婢子共の茶碗もあて
くしつめたるみ成おかけしとていふる
え(う)りいりねとてしれても例でもあられぬとてれど

一多^{おと}おの余^よ不^ふどの損^{そん}失^{しつ}あるべけれどとれお又^{また}おねしも
二十^{にじゅう}成^{せい}ても妻^{さい}も持^もて居^い無^むといふも才^{さい}一^{いち}親^{しん}が所^{ところ}居^い
といふ物^{もの}あり論^{ろん}十^{じゅう}分^{ぶん}の女^{にょ}も有^あくとも逃^にれりても女^{にょ}房^{ぼう}成^{せい}
りこそ居^いるべしぬもづあり女^{にょ}房^{ぼう}がたれべ何^{なに}もあらず
ひごともえんやといふの^の色^{いろ}りまづいふ所^{ところ}居^いぬ事^{こと}も
福^{ふく}ののがづりおとされるとすおよ肝^{かん}外^{がい}の言^{こと}いふまじ
好^{こう}もあらずの^のおて夫婦^{ふうふ}の情^{じやう}合^あなり商人^{しやうじん}の何^{なに}も
いふも親^{おや}たれ方も着^きい附^つのり成^{せい}るひやうて妻^{さい}

でも^{でも}世^よてや^やねば^ばらぬる^るも^もおまもか^かず^ずん^ん独^{どく}
才^{さい}者^{しや}は^はて^て迄^ちが^が過^あり^り妻^{さい}が^がた^たれ^れば^ば後^ごへ^へ出^でても^も早^{はや}く
帰^{かへ}る^る所^{ところ}ある^るのが^が人^{ひと}情^{じやう}なり^り名^な古^こ屋^やう^う大^{だい}坂^{さか}の^の所^{ところ}
あ^ある^る所^{ところ}の^の足^{あし}親^{おや}父^{ちち}の^の落^{おち}て^て友^{とも}あり^り毎^{まい}々^ざ々^ざ
働^{はたら}いても^も入^い用^{よう}の^の言^{こと}な^なり^りお^おて^て備^ひ合^あれ^れ方^{かた}が^がは^はじ^じり^り
有^あり^りて^て所^{ところ}とい^いふ^ふも^もあ^あれ^れが^が今^{いま}更^{さら}も^もれ^れ成^{せい}り^りて^て
既^{すで}に^に方^{かた}を^をあ^ある^る所^{ところ}を^を現^{げん}在^{ざい}父^{ちち}の^の非^ひ成^{せい}揚^{やう}る^る事^{こと}に^に思^{おも}ひ^ひ
れ^れて^てあ^ある^るま^まい^いと^とそ^その^の知^ちり^りが^がは^はじ^じり^りて^て書^かけ^ける^る事^{こと}も

せざるもくもくつらまをかせのごとくもるひの思ふやう
おもわらばさればとて物定合おうとければ遂一お
潤やうおもひもくもくつらまをかせのごとくもるひの思ふやう
大坂まで来りしも親比詞は違ひし又大坂へ来
て見えれば喜まき具負比侍史やてそれを愛おむ
江戸へとまきば万幸のとのりやるやあやう
いられぬ混雑を並べたれば諸方へさうりかゝる
衆も代もつられぬ入組とて中々かくとも書はく

されどつらまをかせのごとくもるひの思ふやう
今晴の影のつらまをかせのごとくもるひの思ふやう
比を世間のるの何よりあつた我独の命も更さう
つらまをかせのごとくもるひの思ふやう
方ともあつたつらまをかせのごとくもるひの思ふやう
事あつたつらまをかせのごとくもるひの思ふやう
をらたつらまをかせのごとくもるひの思ふやう
の事比總をかけたつらまをかせのごとくもるひの思ふやう

小町の寶母の歎き何れもあはれに思ひて共におのれが身は
上を牛糞とてわらうと老母がなほ「こいつらどうも
てあふぞ」と思ふ親もと一世といへば止のるげき
あふぬらういふるあふらふともあはれに秋は狂言成如
畢お涙文として流ひかいて怪氣傳をい助とて
仕組うけ二番目いけの世の二筋巻の趣向とて瀬川
み搦のせり狂言梅津園と仰あて仕揚とといふ時
も少ながら今年いどよりい廻り合せり二丁めの表紙

不働き為時役者随一の其方を抱く遊るを先
人お沖りお成今と春と漸く二替り興はもせ
ぬ不承隠役者を止しぬ熱意りの者たまを一統お
残念うとくおせまや人の見さる役者お持るまう真
切らせせとて湯治と申すといふまのあまの湯治と
いへばせし秘を居お出あつ大坂もゆくつおたる
手綱をゆるめし懐元のぬらうといふものおあふ
るうかういふお持まんとてたまお元かといへば慶子

をりり後者とあひ居い後者何殊畧おさるるを
夏光巧もよくもあふが見物り嬉しむ後者
と物をさしてても能あるやうふるも先迎の始り
と思ふ漁しりあひと養足ぬ可ふ青味があふり
いとと思ひの作虫の菊の帝の形を用ひ幼年の
為付八代目の物しるり申名の助とちと仕足ぬ
所がわれども今あふ二年もさうさう後ともさう
あふふとの具次肩はけ益程言が出来るる冠者

我高小ぬ徳法色男も又新物し衆んで傳へ居て
ふもさう繪草紙名も八代目の死法あて何繪書物さ
り教習りも妙く文が又すく賣るるさうふも日本國中
皆是實の園十年故こと不動尊の二外を子供の中ふ不動尊世
作小輝く口教席のれば二外も膝を添く有がて地
紋さぬ音ぬ念一々ふ早やされ神色の口眼方と思へ
何りたる地獄より六道の冥夜入をりあて不動尊の口
入ふも真つてて中や我々も十五經の身一なる奉廣

の使りの今般八代目市川團十郎独於名藏一勇しし
 おお元終羅道の者元一因不圖魔五一海一出て中
 市川三井内と又一伏て世成去るる也不於之雅泰
 う中事不為る故一方古事又おをつて死る者
 先若愚よめも終羅道一勇て罪の輕重成
 て後文へ死當めまき若るいふ不勤多に内後
 わればと其終ま重かく既お元組る市川團十郎
 元年中收者杉山才六といふ者速恨有七律意

お於て殺害され終羅なる事し先例ありあられ大
 子孫の者若格何積る不勤多今こそ菩薩地
 中一可成るりあ今八代おありと井を孝子の養も
 あるおれば他おいあんを文屋死るもろれど老る
 の所お慕りく又おわり果るる短氣故の損氣く
 速おと井をお激しわら其あり是候お及んで期
 をのべさる養廢五也これお張あんと候しよりり
 不勤多とよまじく縛の纏うてい返めあひ我

愛を願くの外を其後お差無くとも強き今
け縄しうくくおけや何方へも巻うがしう巖に
吟味して後み道の中りづれへなりとこゆり
巻しけ油うくくせしうくく戸帳を巻く入る

露時雨八代愁抄下の巻 終

